



くすり博物館だより

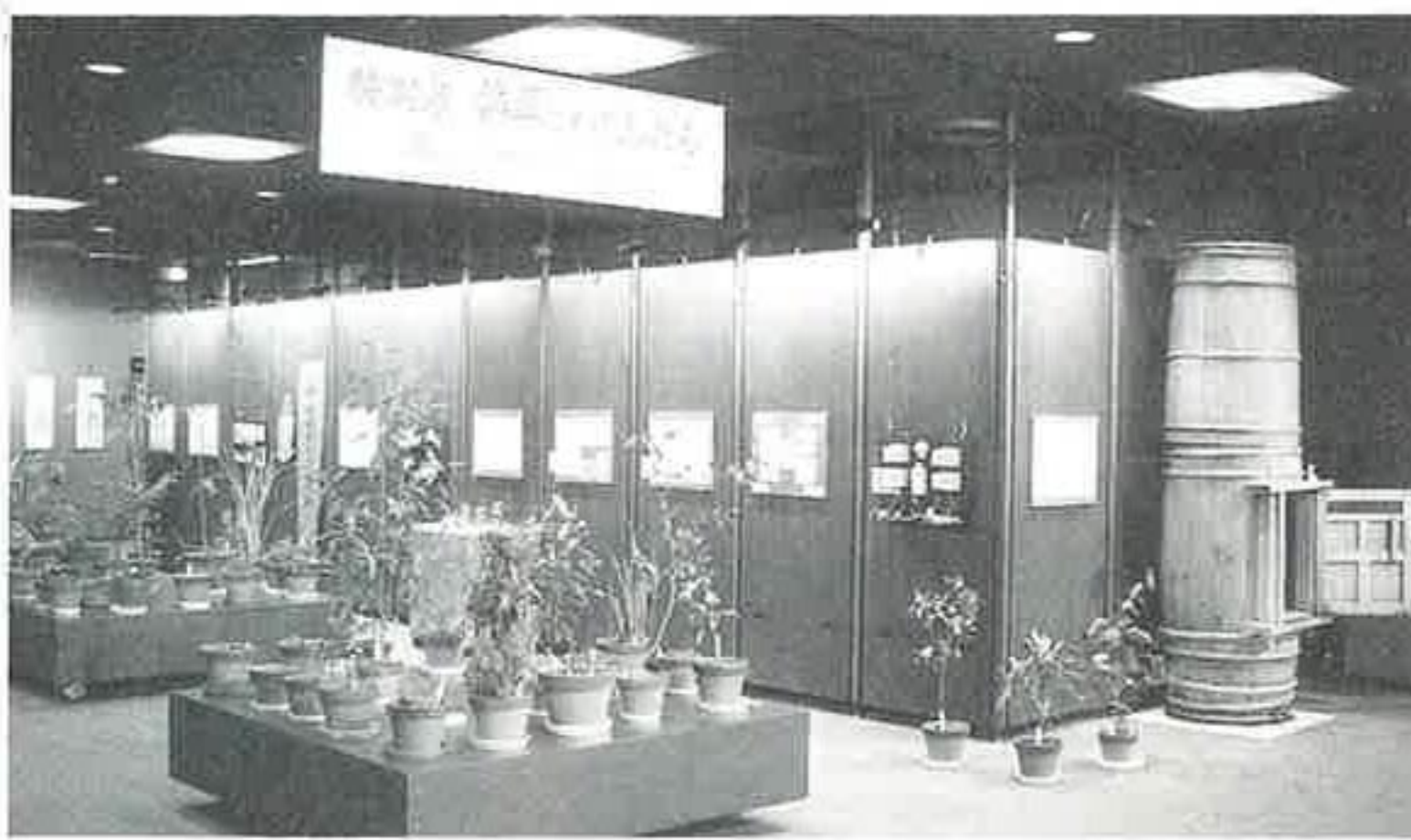
〒501-61 岐阜県羽島郡川島町・内藤記念くすり博物館・Phone: 058689-2101

第22号

特別展 薬草とわたしたち

—暮らしのアイデアいまむかし—

1990. 4. 28~9. 9



鉢植えの植物やその植物を利用した製品などが展示されているほか、植物の匂いをかぐ、サボンソウの根を水に入れてあわだてるコーナーも。

くすり博物館では、年に2回特別展を開催しています。今回の特別展では、暮らしの中での植物の利用法をご紹介します。

植物にもいろいろありますが、この特別展では、特に薬草であって、さらに日々の暮らしの中でも活用されている植物を取り上げました。

展示は、利用法から4つのコーナー〈あじわう〉〈くつろぐ〉〈いろうどる〉〈ふせぐ〉に分けました。

この特別展が、昔から今にいたる暮らしのアイデアを見直すきっかけとなれば幸いです。

あじわう

最近注目されているハーブとは、香りのよい草をさしますが、このハーブや、カレーに用いられるスパイスには、昔から薬として使われてきたものが多くあります。また、日本で料理によく用いられるショウガやシソも漢方の生薬とされます。

このように、わたしたちは薬草と呼ばれるものを暮らしの中で、ごく普通に利用していることもあります。

また最近では、昔からの緑茶のほかに、チャの葉を発酵させた紅茶、

少しだけ発酵させたウーロン茶、西洋のハーブ・ティーも人気です。ドクダミなどもお茶のような飲み物としてよく飲まれています。



▲マテ茶を飲む道具

ブラジルではこれでマテ茶を飲む。マテ茶はモチノキ科の植物の葉の加工品。



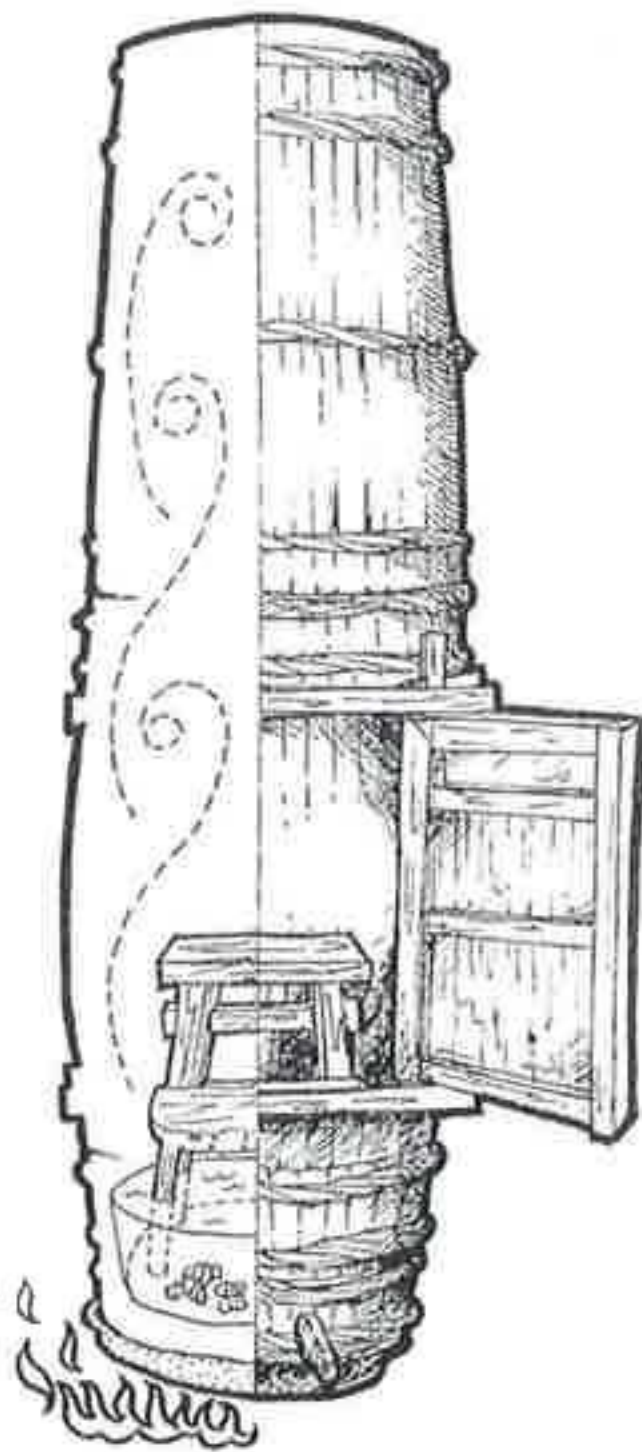
▲会場でハーブのにおいをかぐ小学生

くつろぐ

お風呂に浴用剤を入れたことはありますか？ 浴用剤は、体を温めると同時に、よい匂いで気持ちを落ち着かせてくれますね。今では製品も多くありますが、ときには本物の植物を使ってみてはいかがでしょうか。

日本では、センキュウ、トウキ、ゴシュユなどの生薬を使います。また、

この風呂は、江戸時代、大垣の蘭方医・江馬蘭齋が考案したもので、蘭齋の時代から数えて、三代目のもの。センキュウなどの薬草を釜の湯の中に入れ、その蒸気をたるの中にこもらせて蒸気浴を行う。中は腰かけると一人、立てば三人入るスペースがあります。



▲薬草風呂の仕組み
(実物は大垣市
内藤よね様寄贈)

端午の節句にはショウブ湯、冬至にはユズ湯に入る風習があります。あせもなどにはビワやモモの葉を用いました。

ヨーロッパでは、昔からミントなどのハーブが浴用剤に利用されています。

このほか、お香やポプリのよい匂いを部屋や衣服にたきこめて、リラックスする方法もまた見直されてきました。

ふせぐ

昔から人々は、虫の害に悩まされていました。そこで、虫が嫌がる強いにおいを使って、虫を人の体や衣服に近づけないよう工夫してきました。

クスノキから防虫剤



▲藤澤樟脳看板

いろいろ

布を染めたりお化粧をしたりするのも植物は利用されています。しかし、これはただ美しく飾るためだけではなく、もっと実際に役に立つ生活の知恵でした。たとえば、アイで染めた布はマムシが嫌うので、作業着にアイが用いられたと言われます。また、ヘチマ水やアロエの葉の汁は、肌の調子を整える化粧水に、ツバキやオリーブ、ピナンカズラは整髪剤として用いられてきました。

これらは一時すたれましたが、自然志向から最近ふたたび脚光をあびています。



◀紅花の口紅
(昭和時代)

薬草のベニバナから作られる紅は、昔から女性のくちびるをいろどった。今では山形県の特産品。



▲樟脳とパラソール
を一緒にすると…

融点降下という現象が起り、室温で液体になります。その液が布につくと、染料がにじんだり、しみになったりします。2種類の防虫剤を一緒に使うのはやめましょう。

の樟脳を製造する方法は17世紀、琉球から伝わったと言われます。

またシロバナムシヨケギクから蚊取線香が発明されたのは、明治時代。

このほか、ナンテンの葉を虫除けに重箱に入れたり、イチョウの葉を紙魚(しみ)除けに本にはさんだりします。

薬草豆知識

インドネシアの行商薬 ジャムウ

インドネシアの医薬の底辺を支えている伝統的治療薬にジャムウがあります。もともとは、ジャムウというと、ジャワ島の民間に伝承された植物起源の薬全般のことを指しますが、今ではジャムウをもとにして作られた大衆薬のことも指します。

そのほか、行商薬ジャムウ・ゲンドンガンもジャムウと呼びます。

ジャムウ・ゲンドンガンは、行商人がコップ1杯ずつ売って歩く水薬です。

行商人は自分の家で数種類の薬草を刻み、煎じてこし、ビンに詰めます。こうして作った7～9種類の煎

じ薬をカゴに入れて背負い、おとくい先の部落を回ります。行商先では患者の要求に応じて数種類の煎じ薬を調合し、1杯いくらかで売ります。

煎じ薬の原材料は、ネコノヒゲ、サンピロート、クスリウコン、バンウコン、ジャワニッケイ、イボツズラフジなどを主に用います。ウコンやニッケイ、イボツズラフジは、日本でも薬として利用されています。

行商人は、これらの煎じ薬以外に飲みやすくするためのハッカや蜂蜜、ニワトリの卵なども持っていきます。この卵は放し飼いのニワトリの卵で、精力剤として調合されます。

西部ジャワのスカブミ市で私が会った一家は、母親と娘がジャムウを行商して稼いでいました。娘の亭主

はいるようですが、何をしているのかは不明でした。母親は、中部ジャワのソロ市付近の出身で、親にジャムウのことを教わってスカブミ付近に出てきたと話していました。そこには、若い娘に行商を教えて、結婚まで働かせる中部ジャワの伝統が続いていました。

くすり博物館に展示してあるジャムウの行商の道具は、この母娘の家の予備のものを譲ってもらったものです。



薬用植物園園長
逸見 誠三郎

医薬つれづれ抄(1)

当くすり博物館が所在する岐阜県から、3人の第1級の蘭方医が生まれています。大垣藩医の江馬蘭齋、蘭齋の門下で皇女^{はやのみや}欽宮を診療した小森玄良、そして江戸随一の塾を開いた坪井信道です。

この3人のうち今回の特別展「薬草とわたしたち」に展示されている薬草蒸気風呂の発明者である江馬蘭齋をご紹介します。

蘭齋は、1747年大垣市伝馬町の鷺見莊歳の長子として生れ、大垣藩医江馬元澄の養子となり、侍医として大垣藩主に仕えました。この頃、前野良沢、杉田玄白、大槻玄沢らによる蘭方医学が医家の関心を集めつつあり、蘭齋もこの新

学問を学ぼうと決心して、藩主の許可を得て江戸に出ました。時に1793年46歳でした。

蘭齋は、60歳の杉田玄白より「解体新書」の講義を受け、その翌年には71歳であった前野良沢に学び、3年後に大垣に戻りました。そして「好

江馬蘭齋

蘭堂」という蘭学塾を開き、蘭方医として開業しました。しかし、蘭齋のオランダ医学は、地元では切支丹乱暴医と悪口を言われ受入れられませんでした。そして2年後、大垣藩主の許しを得て、難病に苦しむ京都西本願寺法主の文如上人をその卓越した診断と治療によって救ったことから人々の信頼を一挙に回復したといえます。

江馬蘭齋は、オランダの原書バル

ベツティ・アベリウスからヒントを得て、薬草蒸気風呂を考案して、梅毒第3期の化膿した皮膚の治療に応用しました。この蒸気浴は醜いあとが残らず直りも早いといわれ、我が国の理学的治療史上、蘭齋の名を不滅なものにしました。

この薬草蒸気風呂は江馬家の家僕である氏家庄兵衛

にまかされ、リウマチ、神経痛、皮膚病、胃腸病の治療に利用されました。



くすり博物館館長 藤田 孟

とびっくす



▶薬木園が新しくなりました！

博物館の正門わきから、薬草園の北側へ移築され、面積・樹木の種類とも増えました。植えられた25種類約50本の樹木には説明板がつけられています。また、池が2つ設けられ、水辺の植物を見ることもできます。

樹木の間を小道がめぐっており、奥には小さな広場もあります。

できたばかりですので、少しさびしいかんじです。しかし、5～10年くらいすると、本当に素晴らしい薬木園になるものと期待しています。



▶開館以来の来館者が40万人に

平成元年11月1日に、昭和46年6月の開館以来40万人目の来館者をお迎えすることができました。

40万人目は、浜松市の島津るめ様(78)で、ご感想は「うれしくてなんともいえません。」前後賞は同じ老人クラブの鈴木さち様(67)と山下十二様(71)。皆さんには記念品が贈られました。(前列左より山下様、島津様、鈴木様、後列左よりエーザイ川島工園の佐藤工園長と青木館長)

▶新館長へバトンタッチ

平成2年4月1日付けで、博物館の館長が交代いたしました。

青木允夫前館長は、このたび顧問に就任。かわって、藤田孟(たけし)新館長の就任となりました。

藤田館長は、この3月までエーザイの筑波研究所で医薬品の研究開発にたずさわっておりました。就任にあたっては「くすり博物館がなお一層社会の皆様に親しまれ、皆様のお役に立つ博物館になるよう努めます。よろしく願いいたします。」という抱負を語っています。



▶『博物誌』が新しくなりました

資料の充実にあわせて、『目で見るとくすりの博物誌』を部分改訂しました。新たに所蔵した資料をできるだけ掲載しています。一部1500円です。



☆博物誌・ハンドブックとも郵送できます☆
申込は電話でもハガキでも結構です。送料は申込者負担で、代金は郵便為替にてお支払いください。

▶薬草ハンドブックの改訂版がたいへん好評です

昭和59年の発行以来人気の、『薬用植物に親しむためのハンドブック』が全面改訂されました。252種類の薬草の植物名、別名、生薬名、用部、薬効、特徴の簡単な解説と、植物の精密な絵、および一般的な薬草の利用法を収録。(解説・画とも薬用植物園園長の逸見) 一部500円です。



～お知らせ～

◇植物画講座の年間スケジュールができました。ご希望のかたにお送りいたします。

◇夏の催事(小・中学生向き)のご案内希望のかたは、ご連絡ください。8月4日(土)5日(日)にカレー作り・草木遊び・草木染のこども教室を開催いたします。

～資料寄贈・寄託者 ご芳名～

生野文子	伊藤玄適	伊藤達夫
片桐平智	神谷智恵子	絹川富三
小嶋三千年	阪本秀策	陳 玉麟
虎谷豊二	早田道治	内藤幸次
根本曾代子	森田愛作	山岡茂男

(敬称略)

ありがとうございました。

人事消息

退職 森部裕子 学芸員
採用 伊藤恭子 学芸員・司書

館長 藤田孟 学芸員 稲垣裕美(編集担当) 学芸員・司書 野尻佳与子 伊藤恭子 庶務 川瀬麻起子 説明員 高橋千寿
薬用植物園園長 逸見誠三郎 顧問 青木允夫
くすり博物館 9:00～16:00開館(月曜・12月29日～1月8日 休館)